

山と博物館

第20巻 第3号 1975年3月25日 大町山岳博物館



春雪

撮影 西沢 要

春と農業

降り積っていた雪が、春の日ざしの中で音を立てて消えて行くかと思うと、ある時は再び冬に逆もどりして、北アルプスから雪が舞いおろる。こうして一進一退をくり返しながら安曇野に春が近づいてくる。

雪の下で眠っていた田んぼが姿を現わし、黒い土にぬくもりが出はじめる頃、山ろくの農家では農作業の準備をはじめめる。

我が国に稲作農業が伝わったのは、今からおよそ二千三百年前だといわれる。それから今日まで、技術や栽培品種に幾多の改良や進歩があつたとしても、春になると種をまき、秋には取り入れと、一年をサイクルにしながら営々と継続されてきた作業である。

この稲作技術は近年になつて著しく変えられた。その変化は工場生産される無機肥料と農業を際限なく多量に投入して生産を上げる技術である。今から少し前は、村落周辺の里山から運び出した木の葉や、家畜の副産物である畜肥や堆肥をすき込んで土を養ない、地力を持続させながら生産をあげていた。

「日本の農業から学ぶべき何ものもない。なぜなら、日本の農業は無機肥料と農業の上にあいたアダ花だから」

これは、東南アジアの留学生を迎えている東京農大の中村武久先生に語つた一留学生の感想だという。

さしあたって不用になつた里山の雑木林は、多くが観光開発業者に身売りされ、別荘地やスキー場に変つた。そのあたりには赤・青・黄とはなやかな服装や、にぎやかな人の声があつた。しかし、有機物を失ない農業にいたためつけられた田んぼのあたりは、土から産まれ土に化しながら、二千年このかた稲とともに生きてきた鳥や虫など生物たちは、春が来たのに声もたてない。

(平林国男)

大町山岳博物館

入館者対象質問紙調査の結果について

降旗 英子

はじめに

昨年度は山博入館者の最も基本的な実態をつかむために、大人券による入館者を対象に、①性別、②年齢、③職業、④住所、⑤一緒に来館した人、⑥大町山岳博物館に来た動機、⑦大町山岳博物館を何によって知ったか、という項目について質問紙調査を行なった。(本誌第19巻第1号に発表)

今年度は、入館者のより確かな実態をつかむために、昨年の調査と同様の項目、①②③④⑥を組み入れ、新たに本館へ来た回数や項目と、山博に対するいくつかの意見調査項目を加え、質問紙調査を行なった。

調査方法

調査期間は昭和49年8月7日(水)～8月13日(火)の一週間で、朝8時30分開館から午後5時の閉館時までである。調査対象は、その間の大人券、小人券による入館者全員である。団体の場合は20名に対し、1名の割合で依頼した。

受けつけて入館券とともに質問紙を手わたし、裏山の動物園にぬける出口の所に記載所を設け、投入箱を置いておいた。

調査結果および考察

一、山博入館者の実態について

調査期間中に配布した質問紙は3054枚である。回収数は男123枚、女204枚、計244枚で回収率は80.0%であった。

男女比は1.03:1で男がやや多いが、おおよそ男女半々である。

住所別内訳では、県外者が81.4%と圧倒的に

多く、大町市在住者は4.4%である。この結果は昨年度の9月～10月にかけて行なった調査の結果とほぼ同率である。

次に県外者の場合、どの地方から訪れた人が多いかを調べてみると、やはり昨年と同傾向で、関東地方が最も多く、ついで東海地方、近畿地方となっている。関東地方の中でも東京がその約半数を占めている。

年齢別に見ると、20～29歳の22代が全体の29.2%と最も多く、ついで10代の25.5%である。20代をピークに年代が上になるほど利用者は少なくなり、これも昨年の傾向と同じである。

職業別にみると、男女合わせて、学生が38.8%と一番多く、ついで民間会社員、公務員の順である。学生というのは、小・中・高校生、短大生・大学生、各種学校生徒、その他であり、小学生が学生のうちの40%を占めている。学生が多いのは、調査期間が夏休み中であるという条件が作用しているのは明らかである。男女別にみると、男の場合、学生39%、民間会社員31%、公務員14%の順であるのに対し、女は、学生38.0%、無職22.2%、民間会社員16.2%、公務員10.8%の順である。

公務員、民間会社員、自営業、公共企業団体職員を職業としている人について、どんな産業にたずさわっている人が多いかを調べてみた。昨年の調査での職業についての質問は自由記述にしたため、はっきりした実態がつかめなかった。今年は大町市統計要覧48年度版の「産業分類別就業者数」でとり上げられた職種を参考に産業を分類し、あらかじめ選択肢を設けておいた。男の場合、最も多いのは製造業の22.9%で、公務(教育)14.5%、商業13.2%である。女の場合は、公務(教育)が

21.9%で最も多く、ついで製造業11.7%、サービス業(自由)10.0%となっている。男女ともに上位を占めているのは、製造業と公務(教育)にたずさわっている人が多い業種であるため、来館者も多いためである。公務(教育)にたずさわっている人の来館の多いのは、社会教育機関としての博物館施設の特徴と考えられる。公務(教育)にたずさわっている人というのは、主として公立の小・中・高校の先生であろうが、少なくとも、これら学校教育にたずさわっている人々は、他の産業に従事している人々よりも博物館に対して関心をもっているといえるのではない。

山博を訪れた動機については、男女とも旅行の途中に立ち寄ったという人が一番多く、全体の62.1%、ついで登山にきての15.6%であり、昨年の調査結果とほぼ同率である。大町市在住者の来館動機の内訳は、「人を案内してきて」が41.1%と一番多く、ついで「公園へ散歩にきて」が36.1%となっている。その他が10.2%を占めているが、「遊びにきて、ハイキングにきて、釣にきて」などであって、「公園へ散歩にきて」という項目に加えてよいものである。このことから、山博は市民にとって、お客さんが来た場合、案内してくるような観光的な施設であったり、また、山博のまわりの公園の方が散歩やハイキングに来る場所として親しまれているのではないかとということが予測されるのである。

山博の利用者の大部分が県外の旅行者であるならば、山博の入館者の大部分は初めて訪れる人であろうことは考えられるが、その実態を知るための項目を設けた。結果は、初めて訪れたという人が84.3%と圧倒的に多く、2～3回、4回以上の順に少なくなる。この傾向は、男よりも女の方が強く、女の場合、9割近くが初めての来館である。これを、大町市在住者だけをとり上げ集計してみると、4回以上が一番多く、ついで2～3回、はじめ

の順であり、2回以上、すなわち、今まで来たことのある人が80%以上であった。

二、「見学する前、大町山岳博物館というの、どんな所だと思っていましたか?」という質問について

質問の目的は、観覧者が大町山岳博物館をどんな所だと思っていたかを知り、それによって、博物館というものに対して人々がもっているイメージを知る手がかりにしようとするものである。そこで人々がもつと思われるイメージをできるだけ限り拾い上げ、それを山博の内容に合わせて文章にし、選択肢とした。

(イ) 大町地方の自然や歴史などについて調査や研究をする所である。↓調査・研究機関

(ロ) 大町地方の自然や歴史などについて学習する場である。↓学習機関

(ハ) 大町地方の古くさいものや、めずらしいものを並べて見せる所である。↓見せ物小屋的施設

(ニ) 楽しいものがたくさん並べられ、遊び場のような所である。↓娯楽施設

(ホ) その他

結果は、「調査・研究機関である」と答えた者が1.1%で一番多く、ついで「学習機関」が8.9%、「見せ物小屋的施設」が17.3%となった。

この山博に対するイメージを大町市在住者と市外の人とに分けて比べてみると、大町市在住者の場合、見せ物小屋的施設というイメージをもっている人が一番多く、それに対して市外の人、調査・研究施設というイメージをもっている人が一番多い。

小人と大人では、山博に対するイメージはどう違うであろうか。当館では、小・中学生を小人とし、高校生以上を大人としているが、それにしたがって小人・大人ごとに意見を集計、比較してみた。小人の場合、学習機関というイメージをもつ者が一番多く、33.1%、次が見せ物小屋的施設25.6%、調査・研究機関23.7%の順である。それに対し、大人の場合は、調

査・研究機関が9.9%、学習施設37.8%、見せ物小屋の施設14.9%の順である。

小・中学生の場合、学校教育やあらゆる面で学習する立場におかれ、意識的にも無意識的にも学習するという態度が身についているため、博物館に対しては、そのイメージをもつている者が多いのではないだろうか。見せ物小屋の施設というイメージも、博物館の外見だけを見た場合一番もち易いイメージであり、その奥に調査・研究が積み重ねられていくことに気づきにくい小人がもち易いイメージではないだろうか。

三、「大町山岳博物館は北アルプスの資料を展示していますが、それについてどう思っていますか?」という質問について

現在、大町山岳博物館では、北アルプスを中心とした資料を展示しているが、更に、①外国の山岳に関する資料も展示した方がよいが、②外国の山岳に関する資料はいろいろな北アルプス以外の日本の山岳に関する資料も展示した方がよいが、③現在そのまま、北アルプスの資料だけでよいかを知るための質問である。

北アルプス以外の日本の山岳についての資料もほしい人と、北アルプスの資料だけでよいという人が多く、ほぼ同じ割合であった。

これを、大町市在住者の意見と、他地域の人の意見に分けて比較すると、大町市在住者の場合は、「北アルプスの資料だけでよい」という人が33%と一番多いのに対し、他地域在住者は、「北アルプス以外の日本の山岳についての資料もほしい」、「北アルプスの資料だけでよい」がほぼ同じ割合である。大町市在住者の場合、北アルプスの資料だけでよいという人が多いことは、山博に対して、やはり、地元博物館として地域性を大切にしたいという気持のあらわれではないかと思われる。

この項目についての大人、小人別の意見を比較してみると、小人の場合、一番多いのが、「北アルプス以外の日本の山岳についての資料

もほしい」、ついで、「外国の山岳に関する資料もほしい」、「北アルプスの資料だけでよい」の順で、大人の場合は「北アルプスの資料だけでよい」、「北アルプス以外の日本の山岳に関する資料もほしい」の順である。

山博は北アルプスのふもとにあり、北アルプスの豊富な資料に囲まれている。大人の場合、山博のそのような条件、立場を理解し、地域性を大切にしていった方がよいという意見の人が多いということではないだろうか。

四、「見学して一番印象に残ったのは何ですか?」という質問について

一人でいくつも上げてくれた人もあるが、あげられた総てを集計すると2647あり、多い方から次の順であった。

①北アルプスの動物・植物に関するもの 987 (87.3%)
②山ぼりの道具・のぼり方に関するもの 531 (20.6%)
③大町地方の人々の生活や歴史に関するもの 458 (17.3%)
④北アルプスの雪や気候に関するもの 344 (13.0%)
⑤その他 151 (5.7%)
⑥スキーツーの道具やすり方に関するもの 90 (3.4%)
無答 86 (3.2%)

五、「展示物の中で、もっと詳しく知りたいものがありましたか?」という質問について

もっと詳しく知りたいものがある人が53.4%、ない人が43%、無答3.3%であった。ところが、男女の間には差があり、男の場合は詳しく知りたいものがある人が多いのに対して、女の方は詳しく知りたいものがない人が多い。

もっと詳しく知りたいものがあつたということ、あらかじめ何かを知ろうとして来館したか、あるいは見ているうちに、もっと詳しく知りたくなったか、いずれにせよ、ある程度興味をもつて見た場合と考えられる。したがって、詳しく知りたいものがあつたかなか、どうかを大ざっぱな意味で興味をもって詳しく知りたいものとして上げられたものは多い順に次のようであった。

①北アルプスの動物・植物に関するもの 517 (5.5%)
②新しい山のぼりの道具や技術に関するもの 270 (3.4%)
③大町地方の人々の生活や歴史に関するもの 239 (3.0%)
④北アルプスの岩石や化石に関するもの 182 (2.3%)
⑤昔の山のぼりの道具に関するもの 161 (2.0%)
⑥スキーツーの道具やすり方に関するもの 70 (0.9%)

大町市在住者の場合は多い方から、「大町地方の人々の生活や歴史に関するもの」、「北アルプスの動物・植物に関するもの」、「北アルプスの岩石や化石に関するもの」の順で、大町市外在住者の場合は、「北アルプスの動物・植物に関するもの」、「新しい山のぼりの道具や技術に関するもの」、「大町地方の人々の生活や歴史に関するもの」の順であった。

印象に残ったものは、同時に、「もっと詳しく知りたい」という傾向が強いであろうことは考えられ、今回の調査結果もその通りであった。ところが、大町市在住者の場合は、印象に残ったものとして一番多く上げられたものは「北アルプスの動物・植物に関するもの」であったが、もっと詳しく知りたいものとしては、「大町地方の人々の生活や歴史に関するもの」が一番多かった。この二つは、それほど差はないが、その理由を考えてみる。

印象に残っても、必ずしも更に詳しく知りたいと思うとは限らない。実際、印象に残ったものは?という質問に答えた人は2357名いたのに対し、更に詳しく知りたいと思うものがある人は130名であった。更に詳しく知りたいと思うものは、印象に残った中でも、強く印象に残ったものではないかと思われる。

大町市在住者の場合、更に詳しく知りたいもの、すなわち、印象に残ったものは、「大町地方の人々の生活や歴史に関するもの」の方が多かったということがある。

六、「展示物の説明について」

とても、字について、内容についてなど、いろいろ考えられるが、それらを一緒にして、わかり易かったかどうかを問う大ざっぱな質問である。

その結果、「非常にわかりやすい」と「わかりやすい」を合わせると67.9%になり、半数以上の人にとって、わかり易かったということがわかった。

しかし、小人と大人では説明の難易はかなり違うはずで、それを比較してみた。仮に、「非常にわかりやすい」を2、「わかりやすい」を1、「どちらともいえない」を0、「わかりにくい」を-1、「非常にわかりにくい」を-2というように点数をつけ、平均点を算出して比較してみると、大人は0.86、小人は0.3であった。

七、「大町山岳博物館に来てみてよかったですか?」という質問について

山岳博物館に来るには、交通の便が悪いとか、展示内容に興味がある人やない人や、旅行の途中に寄った人、人を案内してきた人など、いろいろな条件、状態があるが全体として、とにかく来てみてよかったですかどうかを問うものである。

やはり、「非常によかったです」と思う、「よかったですと思う」、「どちらともいえない」、「よくなかったと思う」の5段階をつけ答えてもらった。「非常によかったです」と「よかったですと思う」を合わせて、89.3%となり、大部分の人が山岳博物館を訪れてよかったですということがわかった。

(山岳学芸員補)

大町口登山案内人抄録—その3—

荒井今朝一

五、昭和時代の案内人

今月は、結成以後参加した人々を紹介する。かつて山案内をした人で今も丈夫なのは、桜井一雄、平林高吉、勝山佐久衛の三氏である。三氏とも案内人組合結成時にはその名がみえない。このうち一番早く参加したのは桜井氏で、結成直後の大正七年(一九一八)頃らしい。平林氏は桜井氏に誘われて昭和の初め頃、また勝山氏は昭和五年(一九三〇)頃参加している。そのほかすでに亡くなったかたでは、桜井氏の弟親次氏や借馬の小日向梅治氏なども後に参加している。

これらの人々が参加する時代になると登山もかなり普及してくる。それにもなつて、トラブルなど登山者との間にも、種々の問題が起きてくる。そこで長野県では、登山案内人に許可証を与え、それによつて案内人の質の向上をはたそうとした。これが「登山案内人取締規則」と呼ばれるもので、大正十二年(一九二三)に公布された。しかし、この規則は百瀬慎太郎氏などが考えた案内人の質的向上とは、まったく異なつたものであつた。百瀬氏が後に「山岳夜話」に書かれた試験風景があるのであつておく。

試験官「アルプスつて山は一体何処にあるのかネ。」

案内人「ドイツとロシアの境にあります。」

試験官「バカ言つちやいかん。あれはネインドとイタリーの境にあるんだよ。」

この他にも「高山植物名を二十書け。」というような問題もあつた。

とにかく、このような試験であつたが、案内人には警察署長の印が入つた許可証を早く持つことが一つの名誉とされた。桜井氏は、当時最も短期間で「案内人」になつた一人でもその時ずいぶんうれしかつたと話している。

案内人は、この頃でもまだ猟師を兼ねる人達がかつた。桜井氏は祖父の伴五郎氏が大町有数の「カモシカ撃」であつたこともあつて、本人も「何も悪いことはしなかつたが、密猟だけはやつた。」と話している。一方、勝山氏は「殺生は絶対にしなかつた。肉だけは食べてみたがうまかつた。」と対照的である。案内人達に狩猟を教えたのは、伴五郎氏をはじめ、品右衛門の子息一兵三郎、富士弥一の諸氏や遠山林平氏などであつた。桜井氏は狩猟もしたが、また大の動物好きでもあつた。家では、犬、ネコをはじめヤギ、ニワトリ、キジ、サルなどあらゆる動物を飼つてた。余談になるが、当博物館のカモシカの何頭かは、桜井氏のヤギ乳によつて保育された。

昭和時代も恐慌から大陸侵略の時代へと向つてゆく。日増に戦争は下口沼化し、大正リベラリズムは、しだいに色あせてゆく。登山者に対するチェックもきびしくなつてゆく。ちようどそんな昭和十年(一九三五)頃桜井氏はドイツ、バイエルン社の技師夫妻を案内して大町一黒部一富山一糸魚川一軽井沢と巡つてゐる。

ドイツは当時日本と同盟を形成していた友好国であつた。ところが毎日くだけかがつけて来る。駅では身分証明書と許可証の提示を要求され、雪車の中では、少し離れたところからジロジロ見る者がいる。やつと軽井沢へ着いてもどると警察から取調べをうけた。特に写真にはうるさかつた。スパイと思われていたのである。他の外人の案内人も多かれ少なかれこんな調子であつたようである。

昭和十六年(一九四一)太平洋戦争が起きる。案内人達も若い人達は戦場へ、老人は家に閉じ込められるようになる。もちろん山へ行く人間などほとんどない。大町登山口の拠点「対山館」も慎太郎氏の努力のいかにもなく、ついに店閉まいへと追い込まれた。再び登山者がぼつぼつ入山しはじめるのは昭和二十三年、四年頃からである。桜井氏は、弟親次氏と平林氏の三人で再び案内をはじめ

遵守事

- 一、就業中ハ必ス此ノ證ヲ携帯スヘシ
- 二、亡失又ハ毀損タルトキハ再交付ヲ願出ヅヘシ
- 三、警察官吏又ハ案内依頼者ノ求メアリタルトキハ之ヲ呈示スヘシ
- 四、此ノ證ハ之ヲ他人ニ貸與スヘカラス
- 五、宿屋、料理店、飲食店、沐浴所營業者其ノ他ノ者ト結託シ宿泊遊興若ハ物品ノ購買ノ勧誘ヲ爲ササルコト
- 七、案内依頼者ニ對シテハ懇切ニ接遇スルコト
- 八、廢業、就業停止若クハ許可ヲ取消サレタル時ハ五日以内ニ許可證ヲ返納スヘシ

山案内人許可証

山案内人 小日向梅治氏使用のもの

た。まだまだがなればれた。百瀬氏は桜井氏を評価して「若手で優秀な桜井一夫、同親次の兄弟」と言っている。ところが、昭和三十年代へ入ると登山道は整備され、小屋は近代化され、更に装備も充実してくる。多数の登山者が案内人なしで入山する。すでに案内人は玄人好みとなつていた。少数の若い人のみが近代的ガイドへと変身していった。

六、白馬口の案内人

白馬口の案内人は、明治三十年頃白馬尻付近ではじまつた白馬鉾山によつて生れた。この鉾山の仕事に従事していた人夫達が頼まれて案内をはじめたのが最初らしい。有名な案内人には、吉十、嘉吉、広太郎などの諸氏の名がみえる。百瀬氏によれば、この案内人は高山植物にくわしかつたようである。明治時代にこの山を舞台に活躍した植物学者河野令蔵氏や武田吉久氏の影響によるものだろう。

後には、百瀬氏自身も市三郎という当時十九歳の少年を案内として登つたことが記録に見えている。白馬口の案内人組合は、その後も発展し、現在では全国一の人員(一七二名)を擁して活躍している。

「寄贈ありがとうございます」
○日本風景論 (第11版) 大町市神楽町 浅井正弘氏寄贈
著者志賀重昂氏が当地を訪れた時の寄贈本で、直筆サイン入りのもの。第11版は明治33年発行であつて、この本より、日本の登山ははじまつたといわれています。

山と博物館 第20巻 第3号
一九七五年 三月二十五日発行
発行所 長野県大町市丁E1②〇二一
印刷所 大町市下仲町 山岳博物館
定価 年額 四〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野二二、一九三三)